

令和4年度 園評価の結果について

学校法人 北邦学園

認定こども園札幌自由の森幼稚園・保育園

令和4年度に実施した認定こども園札幌自由の森幼稚園・保育園の自己評価の結果の概要は、次のとおりです。

建学の精神 「自然から学ぶ」

1 本園の教育保育目標

◎ 思いやりのある子 ◎ たくましい子 ◎ 考える子

【各年齢・年間のねらい】

- 0歳児 一人ひとり安心して過ごし、保育教諭や友達と一緒にのびのびと遊ぶことを楽しむ
- 1歳児 保育教諭や友達に親しみをもち、自分の思いを表現しながら、のびのびと体を動かして遊ぶことを楽しむ
- 2歳児 (くるみ) 様々な活動を経験する中で、興味関心を広げ、保育教諭や友達に親しみを深め、自分の気持ちを表現しながら遊ぶことを楽しむ
(たんぽぽ) 安心して園生活を送り、いろいろな遊びや友達に興味をもちながら、のびのびと遊ぶことを楽しむ
- 3歳児 様々な遊びや活動に興味をもつ中で、自分の気持ちや考えをのびのびと表現しながら友達と一緒に遊ぶことを楽しむ
- 4歳児 様々な活動の中で、友達と気持ちや考えを伝え合い、受けとめ合いながら、一緒に遊ぶことや表現することを存分に楽しむ
- 5歳児 様々な活動に見通しや意欲をもって取り組み、共通の目的に向かって友達と協力し、認め合いながら活動することへの充実感を存分に味わう

自己評価	各学年のねらいに対する評価内容
「A」	<ul style="list-style-type: none">一年を通し、その時期の子どもの育ちを大切にしながら、年間のねらいを意識しながら保育に当たることが出来た。年度末現在の子どもの姿と照らし合わせてみると、どの年齢もねらってきた心の成長が感じられ、目標としてきた成長段階に達することができた。2号園児と預かり保育の混合クラスでは、3～5歳児の異年齢保育を行っているが、その中でも各学年のねらいを心に留め、成長を確かめる指標とすることができた。年齢ごとの時間と異年齢の時間の職員同士が一体となって保育していけるよう今後も努力していく。

(A：成果が上かった。B：ある程度成果が上がった。C：もう少し努力が必要。D：改善が必要。)

2 重点的に取り組んだ目標・計画について

目 標	計 画（具体的な取組方法）
<p>1 子ども主体の保育についての理解を深める</p> <p>・PEZ 保育の実践を日頃から意識し、環境構成の工夫、丁寧な援助や声掛けについて学ぶ機会を設け、子ども主体の保育についての理解を深める</p>	<p>☆年齢や育ちに適した玩具や環境作りの工夫と見直しの継続</p> <p>* 乳児保育室が安心して生活できる場、集中して遊びこめる場となっているかの点検・工夫をし、職員間で共通理解する。</p> <p>* 安全面の重視だけで遊び場を限定するのではなく、一人ひとりの遊びの「選択」を保障できるような臨機応変な職員配置、人数確認や子どもへの声掛けの重要性を共通理解して主体性の発揮につなげる。</p> <p>☆絵本の環境についての工夫～研究保育を通して～</p> <p>* 「えほんのおうち」と「もりのとしょかん」の環境を見直し、子どもたちの主体的な遊びの展開について職員間で積極的に意見を出し合い実践する。</p> <p>* 「えほんのおうち」「もりのとしょかん」中心に良質な絵本の厳選や季節のおすすめ絵本紹介をする。</p>
<p>【自己評価】</p> <p>「B」</p>	<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> 育ちに合わせた玩具や環境の工夫については、どのクラスも日頃から意識して工夫してきたものの、マンネリ化している環境に対して直接的な話し合いの場をもっと設けるとよかった。点検・工夫を一時的ではなく定期的に行う習慣を定着していく必要がある。 遊びの「選択」を保障する考え方への意識は変化した部分もあり、フリーデーではより期待をもって戸外遊びをのびのび楽しむ子どもたちの姿につながった。しかし、自由遊び時には、個々の主体性を大事にした援助には職員のより手厚い人数確保が必要な場面があった。人数配置の工夫について皆で話し合う場を設けるなどしながら、色々な視点からの危険に対する考え方を共有していきたい。 研究保育で行った2つの環境についての工夫では、職員間で新しいアイデアを出し合い、皆で考える機会を持つ大切さを改めて感じる事が出来た。2つとも、子どもたちが親しみをもつ良い機会となり、子どもの生き生きとした姿から成果が明らかとなった。しかし、「もりのとしょかん」は冬季閉鎖されてしまうこと、「えほんのおうち」は毎日絵本を手にとれる気軽さに欠けるため、継続的に楽しめるような工夫をしていきたい。

2 保護者理解の視点に立った情報提供や連携

- これまでも保護者の声を聞き必要なことを考え実行してきたが、コロナ禍が続く中でもできることを新たな視点で引き続き考え、寄り添いながら連携につながる

☆コドモン配信について

- 環境への配慮と職員の負担軽減のため、完全ペーパーレスで電子化の統一を図る。その上で、紙での配布を希望するご家庭にも配慮する。
- 各種お便りやお知らせの配信を、早めのお知らせ、時期をずらしての再配信、閲覧しやすい表示方法などの工夫をする。また、子どもの安全管理の観点から、園生活のルールが保護者の方に習慣化されるよう伝えるツールとして活用していく。
- 幼児クラスでは、月1回のクラス日より（紙での配布）から、週に1回のブログ更新、乳児クラスではコドモンでの連絡帳配信が定着してきたと同時に、職員の負担軽減につながっている。さらに保護者がアクセスしやすい端末での更新で、より子どもの姿を共有できるよう工夫する。

☆保護者との信頼関係について

- 上記内容が発展し、連絡がスムーズに伝わるようになった反面、対面や電話でなければ誤解を招いてしまうこともあるため、丁寧にコミュニケーションをとることの重要性を改めて意識し、保護者との信頼関係の構築に努める。
- コロナ禍が続く中でも、できる限り子どもたちの様子を見ていただく機会を設ける。

【自己評価】

「A」

【評価内容】

- スマートフォンでの閲覧、欠席連絡の使いやすさについての保護者からの声が多かったため、ペーパーレスを徹底してきたことの結果が表れていた。お知らせを紙で配布してほしいという方への対応もできていたため、今後も双方への配慮を続けていく。
- コロナ感染状況の情報については、コドモンで素早く伝わり非常に効果的であった。各種お便りの表示については、スマートフォンの小さな画面でも見やすいような文章のサイズ変更、保存場所のグループ分けなど、より見やすい工夫をすることができた。早めの配信に関しては、概ねできており時期をずらしての再配信で保護者が内容を確認しやすいように工夫してきたが、行事に関しては内容を吟味することに時間を要し、詳細のお知らせが遅くなってしまうことがあった。また、細かな連絡事項について適切なタイミングでの再周知に関しては、まだ工夫の余地があるため、今後も細やかな配慮に基づいて配信していきたい。
- 写真付きのブログ配信や連絡帳に関しては、保育の様子が伝わりやすく好評であった。同時に、職員からも負担軽減の声が多かった。ブログに関しては、年度途中でホームページからコドモンでの配信に変更したことでより保護者が目にしやすくなった。クラスによって写真の枚数等に偏りがあるため、今後はある程度統一しどのクラスも同等の情報を提供できるようにしていく。
- 便利なツールが増えた一方で、電話や対面で直に子どもの成長を伝え合うことが信頼関係や子ども理解を深める大切な機会であるという意識が職員間で大切にされてきている。しかし、内容によっては文章と対面どちらで伝えるべきか迷う職員もいたため、迷った時にはすぐに相談できる体制を強化し、一人ひとりがその見極めができるよう園全体で支援していく。
- コロナ禍の影響で異例の欠席数となった行事もあったが、追加日を設けるなどして、なるべく保護者が子どもの様子を目にする機会を失わないように努力できた。日頃の保育に関しても見学可能とお知らせしていたが、思ったより希望者が少なかったため、今後も積極的に周知していく。

3 安全管理・危機
管理の視点での
環境整備の継続

・コロナ禍での行事運
営、命を守る基本的
な安全管理、環境整
備や子どもへの働
きかけを継続して
いく

・安全管理と主体的に
遊べる環境作りの
ための園舎内外の
環境整備

【自己評価】

「A」

☆新型コロナウイルス感染症予防

- ・日々の感染予防対策を継続し、国の方針の変化に伴い陽性者発生時のマニュアルを随時更新すると同時に、保護者への通知がより正確に素早く伝わるよう準備を整えておく。

☆防災用品の備え

- ・防災頭巾と大型そりの購入
- ・各クラスの非常持ち出し袋を毎月の避難訓練時の活用を定着していく。

☆園バス運行の安全管理

- ・他県で起きたバスでの置き去り事故を受け、出欠確認や人数確認の基本的な安全対策を改めて徹底できるような様々な視点で見直す。
- ・学園内でバス運行マニュアルの内容を精査し、ミス起きない仕組みづくりを見直す。同時に、当たり前のことを確実にやっていくことの重要性について職員間で共通理解する。

☆園舎内外の環境整備

- ・日々のヒヤリハットの報告を習慣化することで、日頃からの安全管理の意識を高める。
- ・子どもたち自身で考えて行動できるよう、保育教諭からの声掛けを丁寧に行う。
- ・わんぱく神社の鳥居リニューアル
- ・年長児保育室床張り替え
- ・つり橋補修
- ・野外ステージ、大型ブランコ補修
- ・森の中や駐車場の木の伐採

【評価内容】

- ・コロナ禍での予防策等に関しては、国の考え方が変わる中でも柔軟に対応することが出来、加湿・換気を含めた安全な環境作りを心掛けることができた。また、今年度は対応が緩和されていく状況であったため、様々な行事や異年齢の活動などを増やし、子どもたちがのびのびと過ごすことが出来ていた。
- ・防災頭巾は予算の関係上まだ数が十分ではないため、今後も追加購入をしていく必要がある。同時に、いざという時にすぐに使えるよう、定期的なチェックや日頃から子どもたちが使い方を身に付けられるような配慮を検討していく。また、大型そりは、購入後避難訓練時に使用し、いつどんな時も使いやすいような場所に保管するなど工夫することが出来た。
- ・バス運行マニュアルについては、添乗者だけでなく運転手についても記載の見直しをした。また、他県の事故を受け職員もこれまで以上に十分な確認への意識が高まっていた。今後も日々業務として慣れてしまうことのないよう、全職員が気を引き締められるよう定期的にマニュアルを見直し、添乗者と運転手の連携をしっかりと意識しながら安全を確保していく。
- ・自由の森は近年朽ちた枝が目立っているため、今年のような環境整備や、日々の点検を続けていく。
- ・今年度、園敷地内において、冬道の自動車同士の事故が発生した。安全に走行してもらえるような環境整備、アナウンス、人員配置を続けていく。

4 職員間での連携
と研修への積極
的な参加

・対話の場を大切にす
ることで、情報や保
育観の共有、個々の
負担感を減らすた
めの協力体制あ仕
事分担の工夫につ
いて職員間で連携
をとる

☆対話の場を効果的に設定する

- ・クラス・学年・リーダー間・管理職間などでこまめに対話の場を設け、多様性を大事にしながらも、その都度課題や情報を共有し、より良い協力体制を作っていく。
- ・職種に限らず、全員が子どもと関わる責任をもち、より良い保育を目指して互いに意見を伝え合う場を設ける。
- ・対話の場や会議の中では、一人ひとりが自分で考える発信する機会をもつ。
- ・管理職やリーダーの役割分担が複雑にならないよう、組織図を明確にして共有する。

☆業務削減や時間の使い方の意識

- ・職種によって仕事内容を制限しないことで、正職員の勤務時間の使い方を工夫し、心身の健康を維持できるようにする。
- ・情報共有の方法として PC の環境を新たに整え、ペーパーレス化や業務削減につなげる。
- ・会議は参加メンバーを厳選し、その後の報告を確実にやり全職員に伝達できるようにする。

☆積極的な研修の参加による、主体的な保育についての理解

- ・様々な年齢の保育の研修を取り入れ、子どもの育ちの連続性を学べるような配慮、保護者対応、マネジメントなど様々な分野の内容を受けられるような環境作りをする。
- ・学園での管理職研修では、自園の課題の明確化や保育の言語化の実践を行い、職員に伝え共有できるようにする。

【自己評価】

「B」

【評価内容】

- ・それぞれの職員間で、情報交換や意見交換の場を意識して多く設けてきた。しかし、まだ学年での回数の差や、個人での必要感に差がある。また、会議が単なる情報共有の場で終わるのではなく、課題解決のための対話や新たな問いを生み出す対話となるよう、今後は内容を吟味する必要がある。
- ・職種に関係なく発言できる場は、昨年度と比べて多く作ることが出来た。その分、時間が足りないと感じるが多かった。今後はさらにその時間を捻出する工夫が必要である。
- ・管理職やリーダーの組織図を共有できたことで、相談や報告時に迷いが少なくなったが、まだ組織図の具体的な整理や、協力体制の強化のためにできることがあるため、今後一つひとつ課題を共有して解決していく。
- ・PC上で多くの情報を共有できるシステムは、職員からも業務削減に効果的だという声が多かった。
- ・会議ごとに必要なメンバーで話し合うことを意識することは昨年度よりできていた。ただ、意見を伝え合う場とまとめる場を分けるなど、進め方に工夫の余地がある。
- ・処遇改善加算の要件に伴い、様々な研修の案内が目届くようになった。積極的な参加もできていたが、日程調整が難しいこともあったため、無理なく、学ぶ姿勢を引き続きもてるよう整備していく必要がある。
- ・管理職研修含め、学園の様々な研修が実りあるものになるよう内容を変え、しっかりと機能し始めた。今後は、その学びを参加者以外にもより広めていけるよう工夫が必要である。

3 今後取り組むべき課題

課 題	課題設定の理由
① 「主体的な遊び」の充実のための、保育環境整備や構成の創意工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度取り組んできた環境の活かし方についての話し合いを様々なゾーンにおいて継続し、子どもたちの「遊び」が充実する環境構成の工夫を続けていく。また、日常的にマンネリ化している環境について、客観的に見て職員間で意見を出し合う機会を設け、改めて、各年齢の成長段階や、子ども一人ひとりの成長に繋がる環境構成やそのための整備工夫を考える。 ・人員配置も含め、のびのび遊べる環境整備、子どもたちが遊びを選択し主体的に遊びを広げられる環境構成について考え、子どもたち一人ひとりの思いを尊重できるような保育について職員皆で考え、工夫する。 ・環境構成の創意工夫のために、子ども理解を深められるような対話の場を十分に設ける。
② 保護者理解と連携の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでも努力をして毎年改善している項目もあるが、まだ不完全な面もあるため、常に保護者理解の視点に立つことを忘れず、より意識して保護者連携の充実に繋がるよう努める。 ・感染予防についての考え方も変化していくため、対策をしっかりと行いながらも、保護者が積極的に園に足を運んでいただけるような機会を多く設ける。
③ 職員の業務改善の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・一つの組織として報連相がしっかりとできる仕組みを作り、一人ひとりが主体的に意見を出し合い、行動することで、助け合い、職員間での信頼関係を強化していく。その結果、一人ひとりの負担感が減り、円滑に仕事が進むようになるという目的を皆で共有する。 ・ここ数年様々な業務改善に取り組み、少しずつ成果として出て来てはいるが、まだ改善できる点や課題点があるため、全ての職員の働きやすさが増すよう、引き続き取り組みを進める。また、その内容については、職員皆でアイデアを出し合い、自主的行動へと繋げられるようにする。